

## 運用練習記錄表進行聽力訓練 指導後設認知策略之使用

吳如惠

銘傳大學應用日語學系／副教授

### 摘 要

後設認知策略的使用情形對於在台灣日語學習者 (Japanese as a Foreign Language) 的聽力提升而言相對重要。本研究藉由導入「聽力練習頻率紀錄表」及「真實教材練習檢視單」進行聽力訓練，嘗試指導學習者提升後設認知策略之使用。

共 12 名學習者參與本次研究，訓練期間由上學期期初到下學期期中考前。將 12 名的研究參與者設為實驗組，另外未參與研究的同班同學則設為對照組進行比較分析。在訓練前後的後設認知策略使用變化上，兩組學習者間顯示出差異。另外再將實驗組依據聽力程度分成兩組，進行聽力學習策略使用情形的比較分析結果得知，兩組在不同類別的學習策略使用頻率上也顯示出差異。

最後訓練期間利用訪談方式針對參與本研究的感想及意見進行調查。多數表示經由參與本次訓練後，變得比較會針對自己的聽力練習情形及視聽內容的理解程度進行自我檢視。今後將以如何經由指導學習者後設認知策略的使用，養成課外時間持續聽力練習的自律學習方式為課題持續進行研究。

**關鍵詞：**後設認知策略，聽力訓練，記錄表，自我檢視，聽力學習策略

## **Increasing Usage of Metacognition Strategies by Applying Listening Learning Log Sheet**

Wu, Ju-Huei

Department of Applied Japanese, Ming Chuan University /Associate  
Professor

### **Abstract**

Application of Metacognition strategy is important for learners of Japanese as a Foreign Language in Taiwan to improve listening. With introducing “Listening Practice Frequency Log Sheet” and “Genuine Material Practice Check List” to conduct listening training, this research is to guide learners increasing usage of Metacognition strategy.

12 learners joined this research from beginning of 1st semester to mid-term test of 2nd semester. They were set as Experimental Group and all other classmates were set as Control Group for comparative analysis. These 2 groups show difference in applying Metacognition before and after the training. Furthermore, based on listening comprehension, the attendees were divided into high and low groups to conduct comparative analysis of their usage of listening learning strategies. The result shows difference between 2 groups in using various categories of learning strategies.

Based on the opinion survey of attendees during final period, most of them agree that they are more eager to conduct self-accessing on progress of listening practice and understanding level of audio-visual contents. Will continue research in cultivating habit of self-learning in continuing listening practice after school by guiding learners applying Metacognition strategy.

**Key words:** Metacognitive Strategies, Listening Practice, Log Sheet, Self- Monitoring, Listening Learning Strategies

# 練習記録表を用いた聴解訓練における メタ認知ストラテジー指導の試み

呉如恵

銘伝大学応用日本語学科／准教授

## 要旨

メタ認知ストラテジーの使用は台湾の日本語学習者 (Japanese as a Foreign Language) の聴解練習において特に重要であると考えられる。本研究では「聴解練習頻度記録表」および「生教材練習チェックシート」を聴解訓練に導入し、メタ認知ストラテジー使用の指導を試みた。

全 12 名の対象者が本研究に参加し、第 1 学期の始めから第 2 学期の中間テストまで訓練を行った。訓練に参加した対象者を実践群とし、残りのクラスメートを対照群として、訓練前後のメタ認知ストラテジー使用の変化を比較して見た結果、両群間に差が見られた。聴解能力別で聴解学習ストラテジーの使用状況を比較した結果の違いも見られた。

そして、インタビュー調査を通して、本研究の訓練方法にする対象者たちの感想および意見も調べた。聴解練習行動および内容理解に関する自己モニタリングをよくするようになったと報告するものが多かった。今後は引き続き課外時間での自律学習能力を育成するため、メタ認知ストラテジーの指導法を探って行きたいと考えている。

**キーワード：**メタ認知ストラテジー、聴解訓練、記録表、チェックシート、自己モニタリング

# 練習記録表を用いた聴解訓練における メタ認知ストラテジー指導の試み

呉如恵

銘伝大学応用日本語学科／准教授

## 1. はじめに

JFL (Japanese as a Foreign Language) 学習者は、JSL (Japanese as a Second Language) 学習者のように自然習得の機会に恵まれていないため、言語能力の養成、特に聴解力部分の養成は一層困難である。日常生活において目標言語を使用する必要があるため、学習者の自律的な学習が極めて重要となる。このことは、優れた聴解能力を持った学習者は、課外時間でも自分の興味のある材料で、自律的に効率的な練習を行っていることから伺える。JFL 学習者は、自ら自然習得の機会を積極的に探さないかぎり、自然習得の機会が極めて少ない。だから、自ら目標を立て、学習の計画をし、自分で学習成果をチェックすることがもっとも大事なことになる。そして、この効率的な自立学習を支援するのがメタ認知ストラテジーである。メタ認知ストラテジーは、学習者の学習行動を認識し、モニタリングし、評価するからである。つまり、メタ認知ストラテジーの使用は、JFL 学習者にとっては JSL 学習者以上に大切だと言えよう。

したがって、JFL 学習者の聴解力養成に重要な課題は以下の 2 点あると考えられる。1 つは「メタ認知ストラテジー」の使用頻度の向上である。もう 1 つ目は「学習ストラテジー指導」である。優れた学習者は自分で練習を重ねていくうちに、適切な学習ストラテジーを身につけることができる。それに対し、教師の指導がなければ、適切な学習ストラテジーを身につけられず、語学学習に苦しむ学習者もいる。そこで、本研究では聴解訓練に記録表を用いたメタ認知ストラテジーの指導導入を試みることにした。そして、聴解学習ストラテジーの使用状況及び変化を調査し、考察をしたい。

## 2. 先行研究

語学学習においてメタ認知ストラテジーが重要であることはすでに多くの研究で指摘されてきた。メタ認知ストラテジーとは、言語学習を管理する行動であり、計画 (Planning)、モニタリング (Monitoring)、評価 (Evaluation)などを指す。メタ認知ストラテジーは、学習者に自分の学習行動をモニタリング、評価させることによって、効率的な学習を育てるものである。O'Malley et al. (1989)、Vandergrift (1997) は、モニタリングは学習者の課題達成度および注意力を向上させるのに効果的であり、最も重要な項目とされている。O'Malley et al. (1989)はさらに聴解ストラテジーの研究を通じて、優秀な学習者は自己モニタリング (メタ認知ストラテジー) を多く使用することを明らかにした。Vandergrift (1999)は教師が学習者を巧みにストラテジーの使用ができるように指導をしなければならないと主張した。

竹内 (2003) は、優れた学習者が著した書籍 69 冊に記述された学習記録を分析し、彼らは共通して、効率的な自律学習を行うためにメタ認知ストラテジーを使用していたことを明らかにした。富阪 (2007) は、短期留学生を対象に「日本語上達に関する自己評価調査」を留学開始後と留学終了前に 2 回実施した。教室内外を問わず、学習を成功に導くものはメタ認知ストラテジーをうまく活用していると述べられている。杉谷 (2012) は、メタ認知は自己調整学習の循環過程：「予定 (目標設定、方略の計画、自己効力感)」→「遂行コントロール (注意の集中化、自己教示、自己モニタリング)」→「自己省察 (自己評価、原因帰属、自己反応)」に対し重要な機能をはたすと指摘している。これらの研究結果から、教師の役割を拡大し、適切な学習ストラテジーの指導を行うことで、学習者が授業外の時間にも自律学習を行い、学習する時間を伸ばし、学習内容を増やすことができると推測できる。

このように、メタ認知ストラテジーの使用が優れた言語学習者に成れるかどうかを決定づける重要な要因の 1 つであることは、多く

の先行研究によって明らかにされているのである。

次に、本研究で用いる言語学習ストラテジーの分類について紹介する。Oxford (1990) は、ESL における学習ストラテジーの膨大な資料を整理し、言語学習ストラテジーを、直接ストラテジー (Direct Strategies) と間接ストラテジー (Indirect Strategies) に分類した。さらに、SILL (Strategy Inventory for Language Learning) という 80 項目からなる質問紙を作成した。その中で、直接ストラテジーをさらに、①記憶ストラテジー、②認知ストラテジー、③補償ストラテジーに分類し、間接ストラテジーを④メタ認知ストラテジー、⑤情意ストラテジー、⑥社会ストラテジー、に分類している。Oxford (1990) の分類法は言語学習全般なものである。

本研究では呉 (2012) が JFL 学習者である台湾日本語学習者の聴解能力を養成するために開発した「聴解学習ストラテジー質問紙」を用いて調査をし、分析を行うことにした。聴解訓練に適用できるものとして、「聴解学習ストラテジー」は以下の 6 分類に分けた。分類 A「メタ認知ストラテジー」、分類 B「認知・基礎ストラテジー」、分類 C「視聴・生教材利用ストラテジー」、分類 D「推測ストラテジー」、分類 E「継続ストラテジー」、分類 F「協働ストラテジー」、などとなっている。

### 3. 研究目的

JFL 環境で JSL 学習者に近い聴解能力を養成するには、早期から聴解練習を定期的に行い、耳から日本語をインプットする機会を大量に作ることが大切である。この点を学習者に自覚させるのに、教師からのメタ認知ストラテジーの指導が効果的であると考え。教師は学習者のサポーターとなり、学習者を如何に自律的な学習者へ養成するかを課題にするべきと考える。

本研究では、台湾の大学の日本語学科の学習者を対象に、1. 「聴解学習ストラテジー質問紙」を用い、聴解訓練における学習ストラテジー、特にメタ認知ストラテジー分類の使用状況を分析すること、

2. 学習記録表を用いたメタ認知ストラテジーの指導方法を訓練前後のメタ認知ストラテジー使用変化を比較し、考察することを目的とした。

#### 4. 訓練方法

##### 4.1 訓練対象選出および訓練期間

本研究は M 大学応用日本語学科の 2 年生の聴解クラスの学生を対象にした。104 学年度第一学期の 9 月と 10 月（2016 年）に 2 回聴解能力テストを行い、その結果を参考にクラスの中から上位 7 名と下位 7 名合わせて 14 名の対象者に研究協力を求めたところ、2 名が協力できないと断り、残りの 12 名（以下学籍番号の順に S1~S12 で表示）を本研究に参加してもらい、訓練対象者となり、研究実践群とした。2 回の聴解成績を表 1 に示す。成績上位 6 名をグループ A、下位の 6 名をグループ B とする。2 回とも満点 20 点聴解問題で、グループ A の平均点数は 1 回目が 16.5 で、2 回目が 16.3 であることに  
対し、グループ B の平均点数は 1 回目が 8.3 で、2 回目が 8.8 点であった。そして、残りのクラスメートを対照群とし、訓練は第 1 学期の始めから、第 2 学期の中間テストまで行われた。訓練に参加し

表 1 対象者グループ A、B の訓練前の聴解テスト成績

対象者	グループ	1 回目	2 回目	対象者	グループ	1 回目	2 回目
S3	A	15	18	S1	B	9	6
S4	A	18	14	S2	B	9	10
S5	A	13	17	S7	B	8	11
S6	A	19	17	S8	B	5	5
S11	A	16	14	S9	B	7	13
S12	A	18	18	S10	B	12	8
平均点数		16.5	16.3	平均点数		8.3	8.8

た 12 名の対象者を実践群とし、残り 3 回ともに調査に協力したクラスメート全 13 名を対照群とした。

## 4.2 学習記録表の紹介および指導方法

本研究は、筆者が作成した練習記録表を訓練に用いた。まずは「聴解練習頻度記録表（表 2）」を用い、訓練対象者に、毎日自分が日本語聴解練習にどのくらい時間を費やしているかわかるように、記録を取ることを指示した。記録行動を促すため、毎週授業日に提出してもらうことにした。記録方法は 30 分を 1 単位とし、その間に 5 分間以上でも聴解練習を行った場合○を付けることとし、毎日その「○」の数の合計を出す。第 1 学期の第 7 週目から、第二学期の第 6 週目まで記録を取ってもらった。中間試験及び期末試験など特別な情事がある週は記録表の提出は必要ないことにした。冬休みの間にもせっかく身についたこの練習記録の習慣を続けさせるため、訓練対象者に自分で 2 週間選び、記録をするように促した。

表 2 聴解練習頻度記録表

日付	曜日	時間																								合計
月	日	午前	12:00	12:30	01:00	01:30	02:00	02:30	03:00	03:30	04:00	04:30	05:00	05:30	06:00	06:30	07:00	07:30	08:00	08:30	09:00	09:30	10:00	10:30	11:00	11:30
			12:30	01:00	01:30	02:00	02:30	03:00	03:30	04:00	04:30	05:00	05:30	06:00	06:30	07:00	07:30	08:00	08:30	09:00	09:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00
		午後	12:00	12:30	01:00	01:30	02:00	02:30	03:00	03:30	04:00	04:30	05:00	05:30	06:00	06:30	07:00	07:30	08:00	08:30	09:00	09:30	10:00	10:30	11:00	11:30
			12:30	01:00	01:30	02:00	02:30	03:00	03:30	04:00	04:30	05:00	05:30	06:00	06:30	07:00	07:30	08:00	08:30	09:00	09:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00
日付	曜日	時間																								合計
月	火	午前	12:00	12:30	01:00	01:30	02:00	02:30	03:00	03:30	04:00	04:30	05:00	05:30	06:00	06:30	07:00	07:30	08:00	08:30	09:00	09:30	10:00	10:30	11:00	11:30
			12:30	01:00	01:30	02:00	02:30	03:00	03:30	04:00	04:30	05:00	05:30	06:00	06:30	07:00	07:30	08:00	08:30	09:00	09:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00
		午後	12:00	12:30	01:00	01:30	02:00	02:30	03:00	03:30	04:00	04:30	05:00	05:30	06:00	06:30	07:00	07:30	08:00	08:30	09:00	09:30	10:00	10:30	11:00	11:30
			12:30	01:00	01:30	02:00	02:30	03:00	03:30	04:00	04:30	05:00	05:30	06:00	06:30	07:00	07:30	08:00	08:30	09:00	09:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00

メタ認知ストラテジー使用をさらに働かせるため、表 2 の「聴解練習頻度記録表」の次に、第 1 学期の第 13 週目から、訓練対象者たちに内容理解に関する自己モニタリングの訓練するため、表 3 の「生教材練習チェックシート」を導入した。対象者に課外時間に自分の好きな日本語生教材を選び、練習することを指示した。記録表には練習に使った材料の種類（アニメ、ドラマ、映画、放送劇、その他）



も記入してもらい、対象者の選んだ材料を把握する。

表 3 に示すように、毎回まず対象者に一週間の練習目標回数を決めてもらうことにした。その目標は自分の状況に合わせ、対象者に自分で決めてもらった。指導者がその回数を記入することにし、提出時に目標を達成していたら、言葉でほめ、練習行動を強化した。練習日および練習時間の長さなど基本的な情報も書き込んでもらった。また、生教材の字幕選択についてもこのチェックシートを利用して指導を行った。筆者は、中国語字幕に頼った聴解練習は、効果的な聴解練習にはなり得ないため、初級の学習者の中国語字幕からの早期の離脱が必要であると考えている。そして、中国語字幕からの早期の離脱のためには、教師からの指導が必要だと考える。そのため、このチェックシートに記入できる練習は字幕なし、日本語字幕、あるいは音声のみのものに限定した。内容理解度のチェックはあくまでもモニタリングが訓練目標で、記録しやすくするため、5 段階に分け、数字のみ記入させた（表 3 参照）。

表 3 生教材練習チェックシート

練習目標設定					
週間練習した内容の理解度チェック(一日に複数回 OK)					
目標回数：_____回		実際練習回数：_____回		目標達成： <input type="checkbox"/> 是 / <input type="checkbox"/> 否	
記録表					
名前：_____					
日付／(曜日)	経過時間 (AM/PM00:00~00:00)	長さ (mins)	種類 (1 アニメ、2 ドラマ、 3 映画、4 放送劇 5 その他....)	字幕 (A 字幕なし、 B 日本語字 幕、 C 音声のみ)	理解度の自己チェック(%) (1. 0% ~ 20% 2. 21% ~ 40% 3. 41% ~ 60% 4. 61% ~ 80% 5. 81% ~ 100%)
例：12/11 ( 金 )	AM (PM) 10:00~10:20	20	2	A	2
/ ( )	AM PM				
/ ( )	AM PM				

#### 4.3 聴解学習ストラテジー使用調査及び聴解テスト

全 6 分類 33 項目からなる「聴解学習ストラテジー質問紙」(呉, 2012) を用い、対象者に第 1 学期の始め、期末、第 2 学期の期末の計 3 回聴解に関する学習ストラテジーの使用状況について縦断的に

調査を行った。質問紙の他に、聴解能力の変化を把握するため、参考データとして、100点満点の中間、期末試験の20点分を旧制 JLPT の試験の過去聴解問題とした、テスト問題を作成した。図などの情報有り、および図などの情報無しがそれぞれ5問ずつとした。

#### 4.4 インタビュー調査

訓練期間中、対象者の個別状況を随時把握するため、計4回のインタビューを行った。インタビューを通し、対象者の記録表の実践状況、用いる練習材料および字幕の使用状況を把握することができる。4回のインタビューの実施期間、場所、1人当たり所要時間の長さ、インタビュー内容の要点を以下の表4に整理した。1回目のインタビューは対象者の今までの日本語の学習歴など基礎情報を収集した。2回目は対象者に今までの聴解練習状況、特に字幕なしでの練習経験について調査した。3回目は本研究に参加して、チェックシートを用いて練習を行う状況について調査した。4回目は主に本実践研究に用いたメタ認知ストラテジー使用を促す訓練方法に関する意見、および感想などを述べてもらうことにした。

表 4 全4回インタビューの実施状況

	期間	場所	所要時間	要点
1回目	2015/11/16～20	P3101	04～10分	日本語学習歴の確認
2回目	2015/12/16～18	研究室	07～12分	脱中国語字幕の練習について
3回目	2016/03/08～11	研究室	13～20分	目標設定について
4回目	2016/05/03～17	P3102	09～15分	本実践研究の参加に対する感想及び意見

## 5. 結果

以下に、記録表及びチェックシートの集計結果、学習ストラテジー使用状況及び変化、聴解テスト成績、インタビュー調査結果の順

に検討する。

## 5.1 記録表及びチェックシートの集計結果

まず、表 2 の「聴解練習頻度記録表」の記録結果から、毎日記録した練習量の合計を棒グラフにし、例として、対象者の S6（グループ A）と S8（グループ B）の訓練期間の一部の結果を図 1 と図 2 に示す。毎日記録を取り続けることにより、自己の聴解練習頻度を把握し、練習行動の修正ができると考える。毎日の平均練習量に個人差があるが、記録を取り、図にしてみることで、S8 は図 2 のように、ほぼ毎日練習し続けていることがわかる。

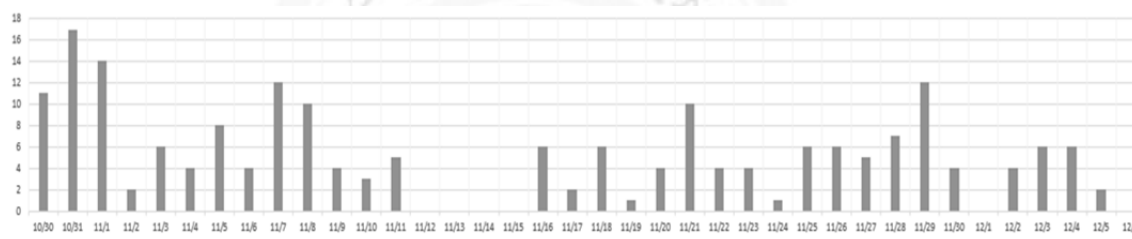


図 1 S6 の練習頻度記録（日割）

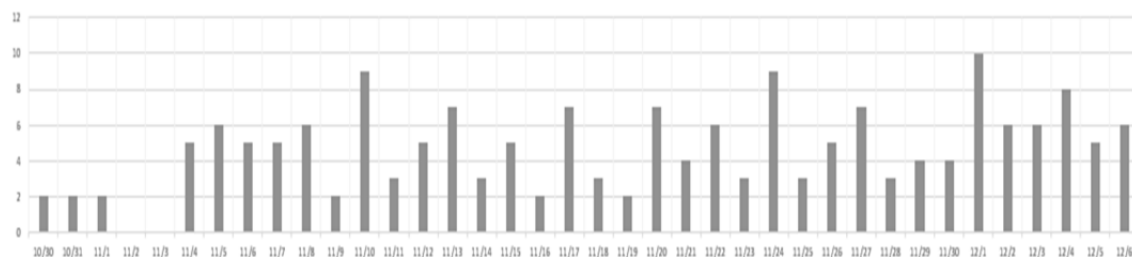


図 2 S8 の練習頻度記録（日割）

そして、図 3 と図 4 は S5（グループ A）と S7（グループ B）の週間集計の練習時間を棒グラフにしたものである。図 3 より、S7 は前半の練習頻度が低かったものの、11 週目に入り、練習頻度が高くなったことがわかる。そして、縦軸を見て比較して分かるように、グ

ループ A の S5 の週間平均練習量は S7 に比べ、はるかに多いことがわかる。このような練習記録を一定期間で取り続け、他人との比較で、自分の不足している部分がはっきり見えてくることによって、反省し、練習行動の修正が期待される。そして、この練習の量の差も、すでに聴解能力に反映していることが聴解テスト成績結果でわかる。

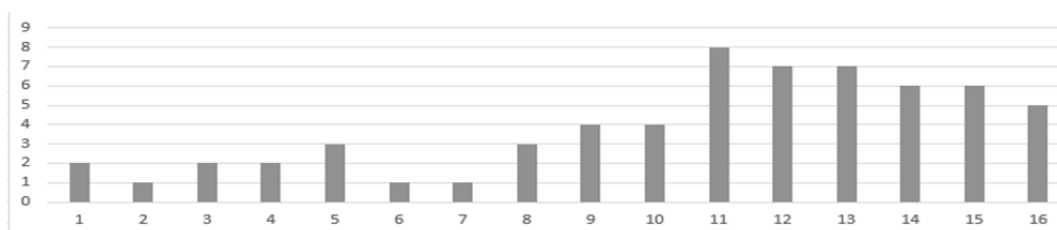


図 3 S7 の練習頻度記録（週割）

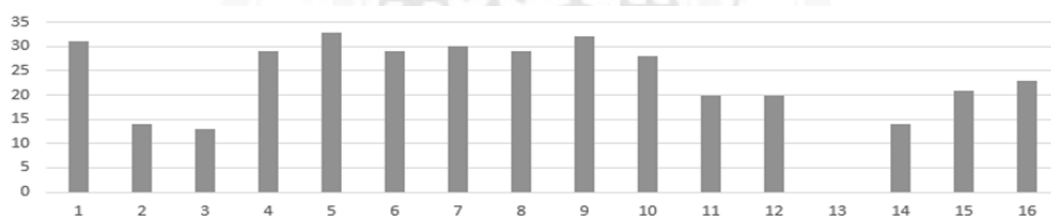


図 4 S5 の練習頻度記録（週割）

図 5 は表 3 の「生教材練習チェックシート」中、A、B 両グループそれぞれの違う字幕の種類で練習した割合を示したものである。グループ A は訓練期間中合わせて、71%の割合で字幕なしの生放材で練習していることがわかる。これに対し、グループ B は字幕なしで視聴練習を行う割合はわずか 24%にとどまっていることがわかる。グループ B は字幕なしより、日本語字幕の利用は最も高く、73%であった。そして、音声のみ材料での練習はグループ A が 10%で、グループ B が 3%しかないことがわかる。

対象者 12 名のデータを合わせてみると訓練期間中に字幕なしでの練習をチャレンジした割合が半数を超え、54%あったことが図 6

でわかる。

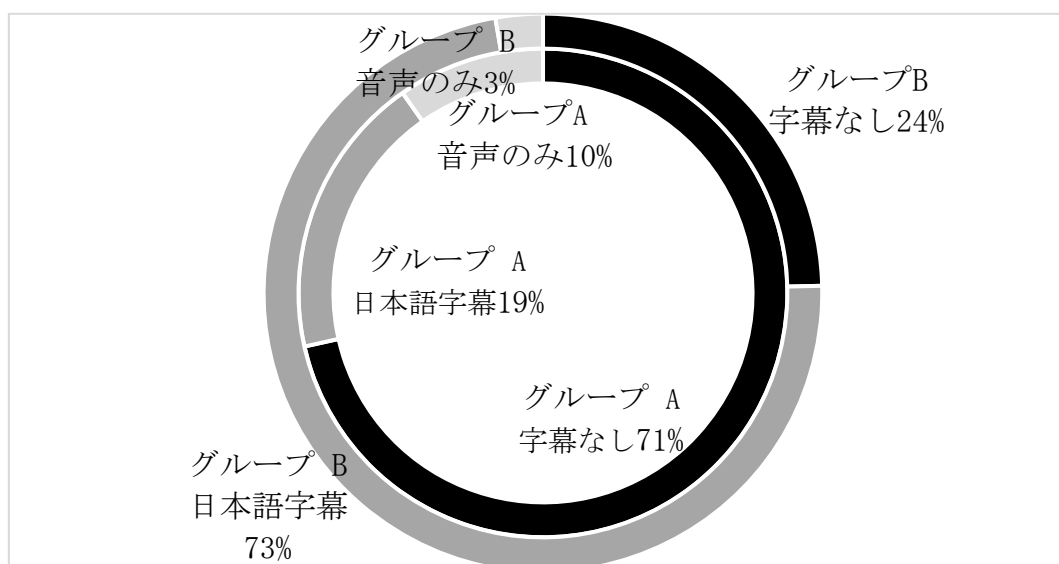


図 5 グループ A、B の字幕選び状況

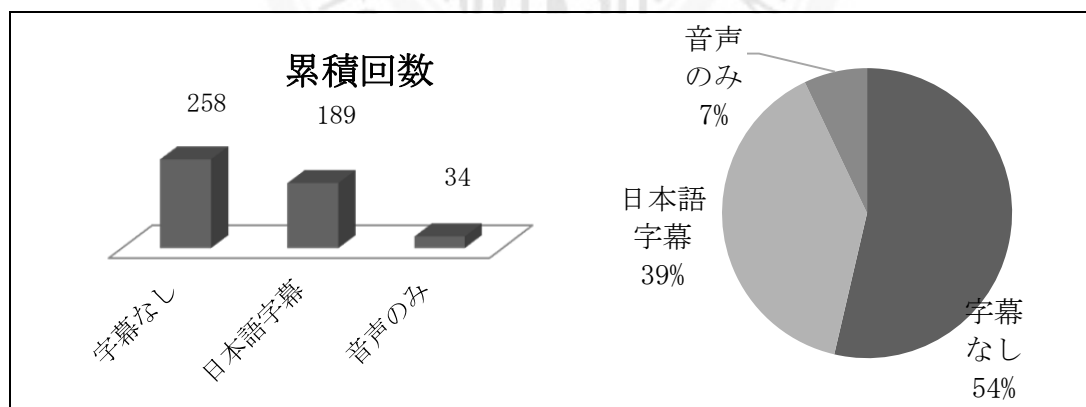


図 6 対象者 12 名の生教材視聴練習の字幕選び状況

内容理解の自己モニタリングは主観的なもので、記録の結果を見る限り対象者一人一人は大きく変化することはなかった。むしろ指示した通り、脱中国語字幕での練習に真剣に努力し、練習を重ねた

様子が窺えた。

## 5.2 学習ストラテジー全般の使用状況及びメタ認知ストラテジー

前節でまとめたように、記録表及びチェックシートを利用し、対象者に自分の練習頻度、練習材料、内容理解を自己モニタリングできるように訓練した。呉（2012）が開発した「聴解学習ストラテジー質問紙」は全 33 項目あり、そのうちメタ認知ストラテジーに関する項目は以下の 6 項目である。1「学習の目標・目的を設定する」、2「聴解練習のための計画を立て、実行する」、3「集中して日本語を練習する」、4「内容理解について自己モニターする」、5「聴解練習における問題点を見つけ、改善する」、6「聴解能力の上達について自己評価をする」である。使用頻度を「非常によく使う（5 ポイント）」「よく使う（4）」「普通に使う（3）」「あまり使わない（2）」「全然使わない（1）」の 5 段階形式で回答してもらった。

「聴解学習ストラテジー質問紙」を用い、3 回調査した結果の平均値を図 7 から図 9 に示す。訓練に参加した 12 名の対象者を実践群とし、対照群は 3 回ともに調査に協力でき、残りのクラスメート全 13 名であった。図 7 を見てわかるように、訓練開始時では実践群と

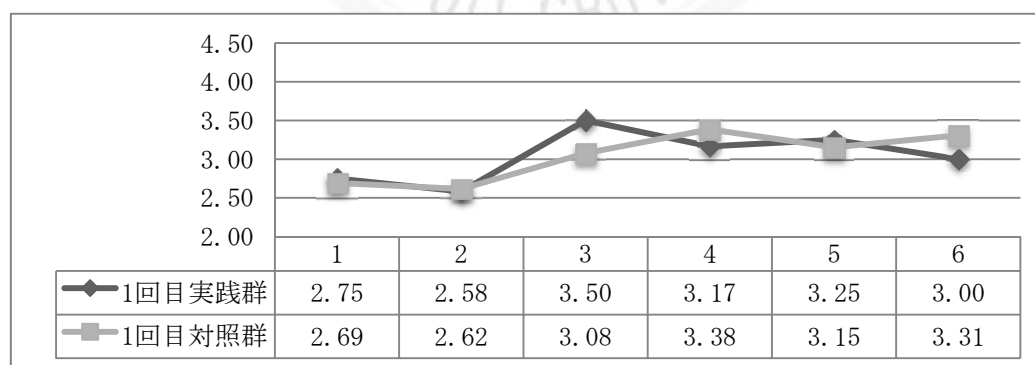


図 7 実践群、対照群メタ認知ストラテジーの使用状況（1 回目）

対照群の間にメタ認知ストラテジー使用に項目 3 の「集中して日本

語を練習する」を除き、ほとんど差は見られなかったと言えよう。

図 8 は訓練開始 2 か月後の調査結果である。図 7 と比べてみるとわかるように、実践群と対照群の間に開きがあることがわかる。この変化は記録表及びチェックシートを用いた訓練法がメタ認知ストラテジー使用に影響を与えたと考えられる。表 5 にまとめた数値の差からも見て取れるように、項目 2 の「聴解練習のための計画を立て、実行する」両群の差が -0.03 から 0.55 に、項目 5 の「聴解練習における問題点を見つけ、改善する」両群の差が 0.10 から 0.60 に、特に項目 6 の「聴解能力の上達について自己評価をする」が両群の差が -0.31 から 0.94 にと最も著しく変化したことがわかる。そして 6 項目ともに対照群より実践群のほうがメタ認知ストラテジー使用頻度が高くなっていることがわかる。

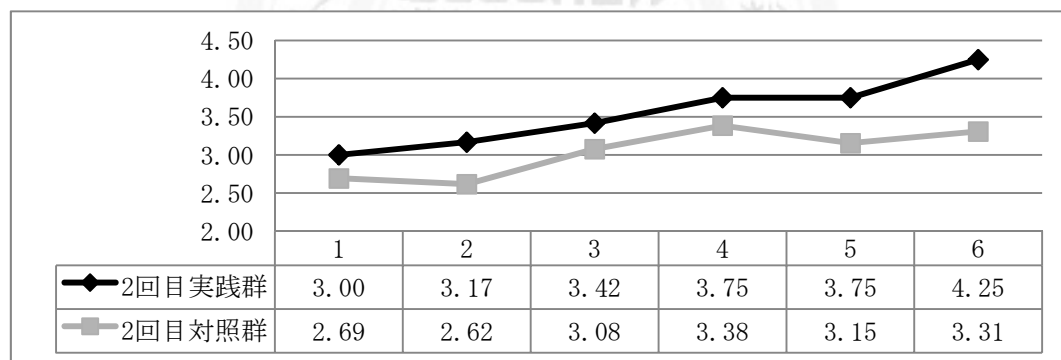


図 8 実践群、対照群メタ認知ストラテジーの使用状況(2回目)

そして、図 9 は訓練終了の約 2 か月後のフォローアップデータを示す。項目 3 から項目 6 のモニタリングに関する項目は、項目 1 と項目 2 の目標設定および計画実践項目より、訓練の効果が維持できたと解釈できよう。

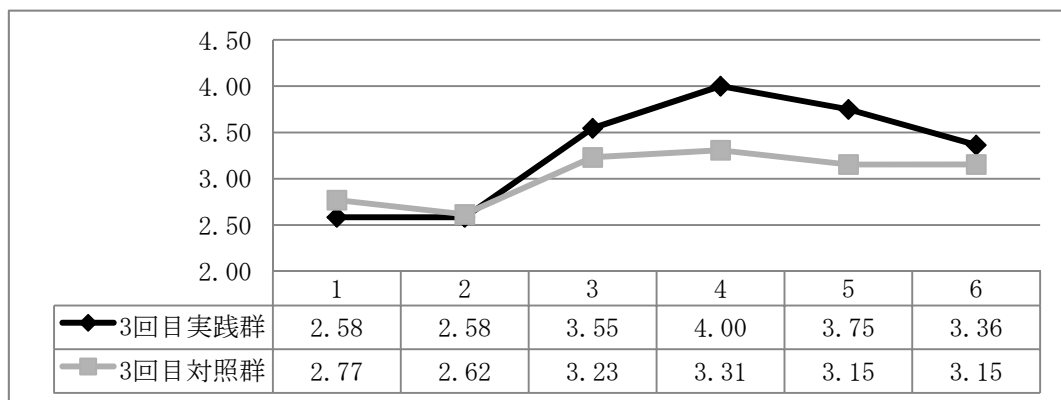


図 9 実践群、対照群メタ認知ストラテジーの使用状況(3回目)

表 5 実践群、対照群のメタ認知ストラテジー使用の差

項目	1	2	3	4	5	6
1回目実践群	2.75	2.58	3.50	3.17	3.25	3.00
1回目対照群	2.69	2.62	3.08	3.38	3.15	3.31
差	0.06	-0.03	0.42	-0.22	0.10	-0.31
2回目実践群	3.00	3.17	3.42	3.75	3.75	4.25
2回目対照群	2.69	2.62	3.08	3.38	3.15	3.31
差	0.31	0.55	0.34	0.37	0.60	0.94

さらに、図 10 に 3 回の実践群と対照群のメタ認知ストラテジー 6 項目の総合平均点を集計した結果、訓練によってメタ認知ストラテジーの使用に影響が与えられたことも再度確認ができた。

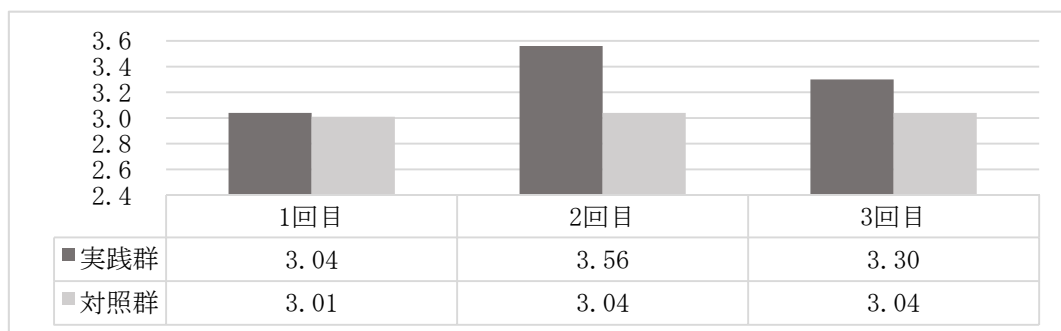


図 10 実践群と対照群のメタ認知ストラテジー 6 項目の平均点



実践群と対照群のメタ認知ストラテジー使用状況を比較するほか、以下に聴解能力別に分けられたグループ A とグループ B の聴解学習ストラテジー全般の使用状況を調べた結果を図 11 から図 14 までに示し、比較することにした。

多くの先行研究で示唆したように、学習ストラテジーの使用は学習成果に大いに関係し、語学力の向上に有意であること(竹内, 1999; 前田, 2002; 大和, 2003; 呉, 2011)が、本研究での調査結果を示した図 11 からわかる。このことから、聴解能力に悩む学習者に対するストラテジー指導の重要性が確認ができた。

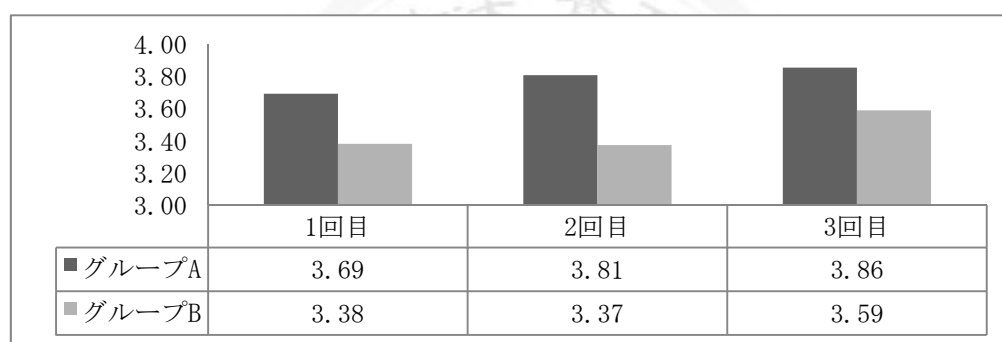


図 11 聴解学習ストラテジー33 項目の総合結果

以下は 33 項目からなる「聴解学習ストラテジー質問紙」の調査結果をまとめる。図 12 から図 14 の結果からわかることは、分類 A のメタ認知ストラテジー使用頻度の増加である。分類 A の使用頻度は、1 回目の調査では最も低かったが、訓練によって、6 分類中の最下位から脱出することができた。次に、聴解能力別に関係なく、分類 C の「視聴・生教材利用ストラテジー」、分類 D の「推測ストラテジー」および分類 E の「継続ストラテジー」が、ほかの 3 分類より使用頻度が高いことがわかる。分類 F の「協働ストラテジー」の使用頻度の低さが目に付く。

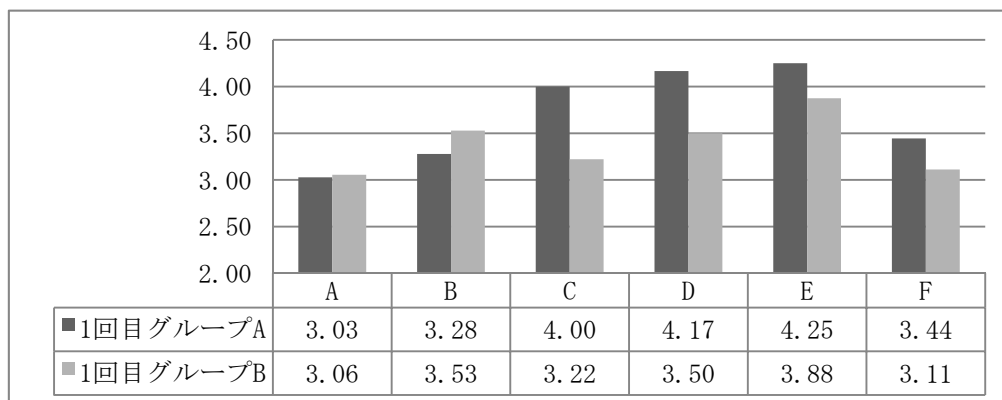


図 12 1 回目の聴解学習ストラテジーの使用調査結果

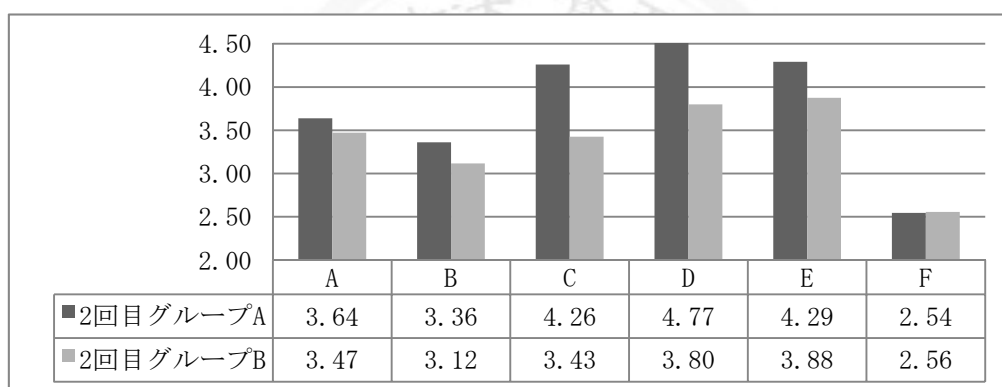


図 13 2 回目の聴解学習ストラテジーの使用調査結果

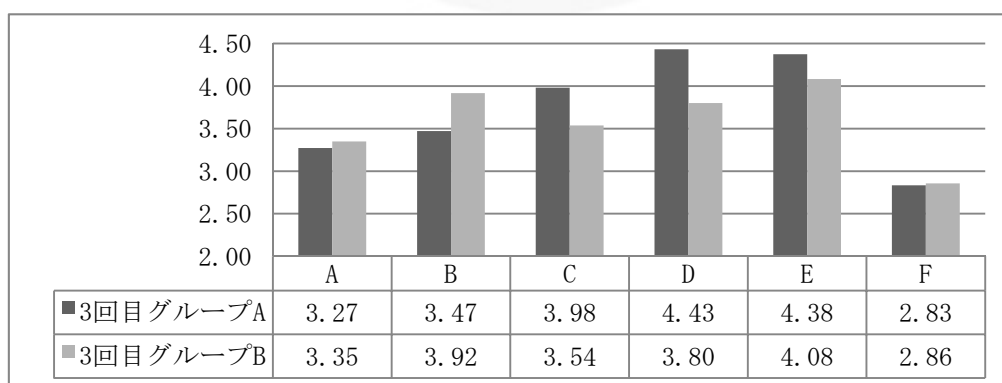


図 14 3 回目の聴解学習ストラテジーの使用調査結果

### 5.3 聴解テストの結果

第一学期、第二学期の中間期末テスト全 4 回の旧制 JLPT の試験の過去聴解問題 20 点のテスト結果を表 6 にまとめた。グループ A の参加者は 4 回ともにクラス平均より上回っている。訓練終了時の第二学期の中間試験の結果がやや高めだったことがわかる。グループ B の結果が第二学期の期末テストの時、初めてクラス平均より高くなった結果が得られた。聴解能力の向上は短時間で、一つのテストで測ることはできないため、参考情報として提供することにした。

表 6 実践群とクラス平均成績との比較

	一中間	一期末	二中間	二期末
クラス平均	14.15	15.93	13.04	15.41
グループ A	16.33	18.33	17.67	18.33
差	2.19	2.41	4.63	2.93
グループ B	13.00	14.67	9.33	15.67
差	-1.15	-1.26	-3.70	0.26

### 5.4 インタビュー調査の結果

訓練期間中には計 4 回のインタビュー調査を行った。詳細なインタビュー調査は、実験対象者が少人数であるからこそできるものであり、また、対象者と聴解練習のカウンセリングをしながら、訓練状況を把握でき、さらに、今後のストラテジー指導に役立つ情報をより多く収集することができると考えたからである。

紙幅のため、1 回目の基礎情報収集のためのインタビュー内容は省略する。2 回目と 3 回目のインタビューは記録表およびチェックシートの遂行を確認する内容であった。主に練習材料の選択および脱中国語字幕の練習状況について調査を行った。2 回目のインタビューは訓練開始約 1 か月後の時点で、対象者が「字幕なしの生材料を視聴する習慣がありますか」の質問に対し、グループ A は 6 人のうち 4 人が「はい」と回答し、2 人が「いいえ」と回答した。グル

ープ B は 6 人全員「いいえ」と答えた。

そして、表 7 に「字幕なしの生放材を視聴するのはいつから試みましたか」の質問回答を整理した。答えた S4、S5、S6、S12 の 4 人は全員グループ A の対象者であった。

表 7 字幕なしの生放材を視聴するの試みはいつから

対象者	回答
S4	大学 1 年の第二学期から
S5	高校 1 年の時、日本語を勉強してから半年経ったところから
S6	まだ日本語を勉強していなかった高校 1 年の時、アニメがきっかけだった
S12	高校 2、3 年の頃、塾で日本語を勉強し始めてから

以下は 4 回目のインタビューから得た本実践研究に参加終了後の感想及び意見に関する質問の回答を整理する。

図 15 に示したように、筆者が作成した「聴解練習頻度記録表」の実行に関して、とても易しい、易しい、普通と答えた人は合わせて 83%であったことから、この記録表の使用は、大半の対象者にとって記録し続ける負担が少ないことがわかる。「生教材練習チェックシート」の実行難易度についての調査も同様な結果が得られている（図 16 に示す）。記録表実行の困難点を表 8 にまとめた。書き忘れることが共通の難点であった。

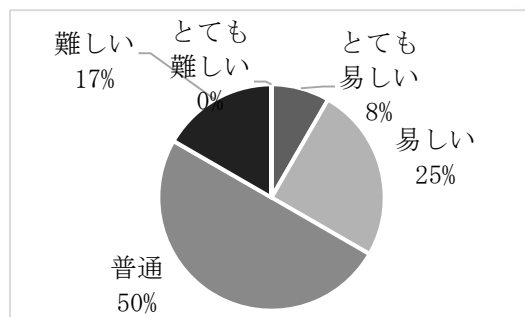


図 15 記録表の実行難易度

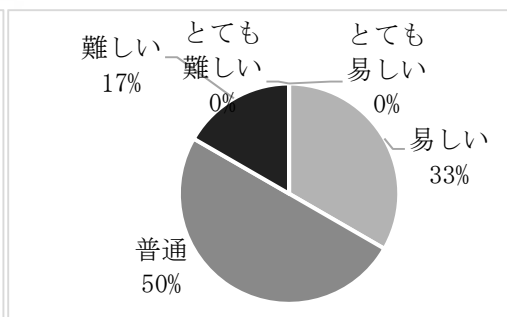


図 16 生教材練習チェックシート実行の難易度

表 8 記録表実行の困難点

対象者	回答
S1	自分の惰性と戦う。①
S4	視聴し終わった後すぐに記録しないと記録することを忘れる。②
S5	記録する習慣がなかったので、よく忘れる。②
S6	練習の開始時間をわすれるので、ちょっと面倒。③
S9	記録することを忘れたときに、翌日に記入することがたまにある。④

記録表を用いて、練習したメリットに関する回答を表 9 にまとめた。参加者が実践を通して練習頻度を記録に記入することによって、自分の練習状況を把握できたり、練習が計画的になったりと答えた。

表 9 記録表実行のメリット

対象者	回答
S1	練習時間内に集中するように自分に言い聞かせる。①
S2	練習が計画的になる。②
S4	自分が一週間通して、どのくらい日本語音声のもので練習したかチェックすることができる。③
S5	自分の練習進捗を把握できる。④
S6	記録し終わったときに愉快的感じがする、足が地についている感じがする。⑤
S9	記憶力の訓練になる。⑥

チェックシートを用いて、脱中国語字幕で聴解練習をし、内容理解を自己モニタリングをさせる訓練を行った。参加者にそれぞれ自分の好きな生教材を選び、練習を薦めたため、内容理解をテストして、具体的に理解度を測ることはできなかったが、メタ認知ストラ

テジー使用の促し効果はストラテジー使用の調査結果から、得られたと考える。内容理解に関する自己モニタリングの困難点を表 10 にまとめた。脱字幕を挑戦しながらの練習で内容理解の自己モニタリングは難しいことがわかる。

表 10 内容理解の自己モニタリングの困難点

対象者	回答
S1	聞き取れなかった箇所を確認のため巻き戻して聞こうと思っても、その箇所が見つからないから、確認できない。 ①
S2	話し言葉や、口語的な表現がわからないとき、悩んでしまう。②
S3	字幕なしは、困難を感じる。③
S4	すぐに記録しなかったら、思い出せない。④
S5	出現頻度の低い単語は、調べにくい、特に字幕なしで練習したとき。⑤
S7	スピードが速すぎたときに、字幕を頼りにする必要がある。⑥
S8	日本語字幕を見ても、反応するスピードがついていけないことがよくある。⑦
S9	理解度を判断するのは難しい。⑧
S10	時々自分が理解したといえるかどうか判断できない。理解程度をどう定義すべきかよくわからない。⑨

しかし、内容理解に関する自己モニタリングのメリットも対象者からたくさん挙げられた（表 11 を参照）。脱中国語字幕での練習を努力し続けることによって、次第に内容理解を上げるためのコツを習得し、内容理解に対する変化も自分自身で感じることができていると報告されている。

表 11 内容理解の自己モニタリングのメリット

対象者	回答
S1	もっと対話に集中でき、内容の重要なポイントを見つけ出す。①
S3	練習を重ねていくうちに字幕なしで視聴するコツをつかむようになる。充実感を感じる。②
S4	思い出しながら番組の内容をメモすれば、内容に関する理解度を把握することができる。③
S6	今は日本人先生の話がすべてわかるようになった。先生が何を話そうとしているかがわかる。④
S8	日本語の字幕を参考に理解に努める。速く中国語に組み立て、理解するようにする。以前より早く理解できるようになった。⑤
S9	自分が進歩したかがわかる。⑥
S10	内容理解の記録を始めてから、自分が進歩したことがよくわかる。⑦
S11	真面目に推測を働かせ、前後の内容を参考に何を話しているかを考える。⑧
S12	何を見たか、理解程度の変化を知ることができる。⑨

次に、「よく練習に用いる生教材」を複数回答してもらった結果を図 17 に示す。「動画」と「ドラマ」と両方が 8 票でトップにたった。次は「コメディ」の 3 票であった。「YouTube」、「音楽」、「映画」、「放送劇」もそれぞれ回答者がいた。

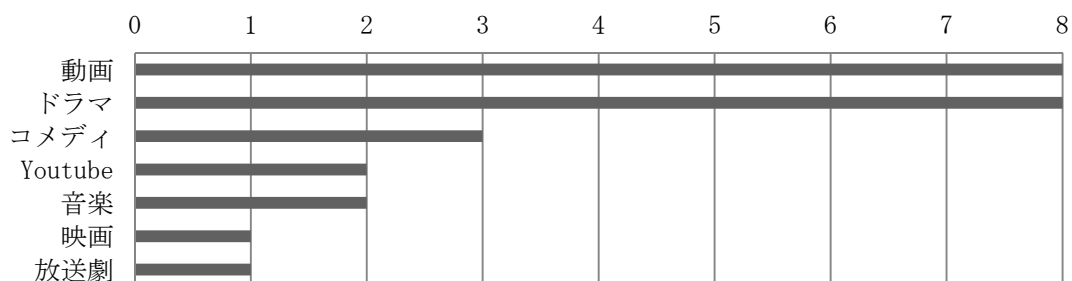


図 17 よく練習に用いる生教材

そして、日本語字幕および字幕なしでの練習の難易度を調べた結果、訓練期間中に日本語字幕の生教材を利用した参加者 9 名のうち易しいと答えた人は 4 人で、普通と答えた人は 5 人であった。字幕なし生教材を利用した参加者も 9 名いた。そのうち、とても難しいと答えた人は 1 人で、難しいと答えた人は 5 人いた。逆にとても易しい、易しいと答えた人は 1 人もいなかった結果となった(図 18 参照)。

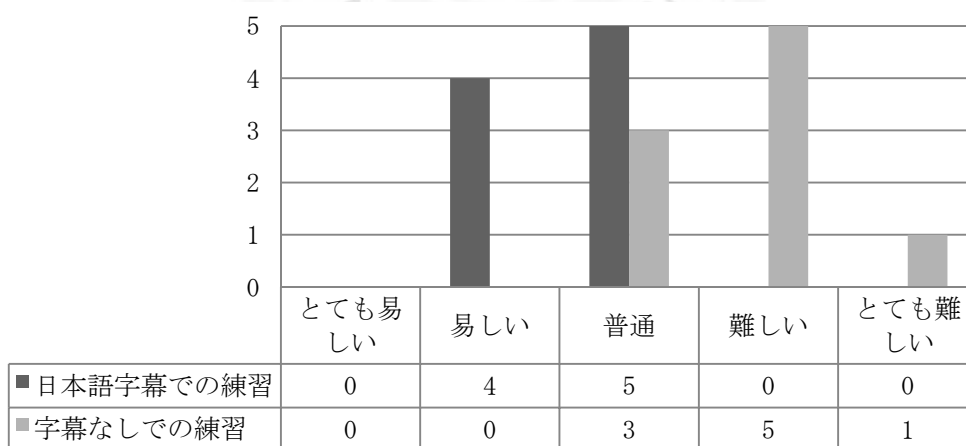


図 18 日本語字幕および字幕なし練習難易度

字幕の有無に関して、現在自分に一番合っている練習方法を答え



てもらった。図 19 に示したように、中国語字幕を答えた人は 1 人もいない結果となったことがわかる。そして参加者全員が今後脱中国語字幕で練習を続けたいと質問に答えた。

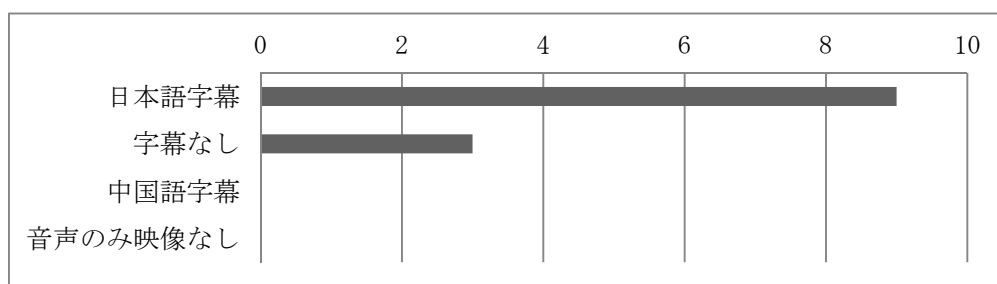


図 19 現在自分に一番合っている練習方法

最後にこの実践訓練に参加して、聴解練習において変わった点を述べてもらった結果を表 12 にまとめた。結果を簡潔に上げると、練習頻度の増加、練習量の把握、内容理解を向上させるため、新たに取り入れた聴解学習ストラテジー、字幕の種類を変更などは参加者たちが感じた変化である。

表 12 この実践訓練に参加して、聴解練習において変わった点

対象者	回答
S1	前は単語文法など細かいところを注意して聞くことはなかった。今は文法の使い方、関連性、話し方に注意して聞くようになった。自分がわかる単語、語句を聞き出し、単語を見つけ出す方法を掴むようになった。
S2	記録表にして、練習量を数字データにしてから、より自分の学習状況が明確になった。この方法を使って、自分の聴解練習状況をチェックする。
S3	前は聞き流すだけ、今は、日本語を聞くと単語、内容の理解を気にするようになる。同じ段落を聞きなおそうともする。

S4	もっとまじめに内容を聞くようになった。授業にも役に立った。より多くの番組を見るようになった。前のように、ただ聞き流して、わからなくても、何も感じないことはなくなった。
S5	前は字幕の種類を選んで視聴することはなかった。今は、字幕なし、あるいは音声のみのファイルを見つけて、練習をする。
S6	自分がますます上手になっていく感じがする。視聴する材料が多ければ多いほど、スピードに慣れてくる。授業でニュースを聞いて練習するときもほかのクラスメートより熟せられる。クラスメートにも練習方法を推薦した。
S7	ドラマのセリフ内容を注意して聞くようになった。日本人が日常会話で使用する文型や、口語表現をもっと理解できるようになった。
S8	前は日本のドラマや、動画を見ることはなかった。今は、少し意識的にドラマを見るようにしてから、興味がわいてきた。今は見る動機も増え、今後の学習効果を期待する。
S9	わからない単語をメモするようになった。新しい知識をメモするようにもなった。以前はこのような習慣はなかった。
S10	字幕なしの材料で練習を始めてから、もっと集中して内容を聞けるようになった。
S11	記録が真っ白だったらよくないので、埋めるために特別に日本語の聴解練習をした。記録しなかったときに比べると、練習頻度がかなり多くなった。
S12	前からよく視聴して、練習する。大きな変わりはない。

## 6. 考察

今回は、学習者がメモしやすいことに重点をおいて作成した練習記録表を用いて、メタ認知学習ストラテジーの使用を促す訓練を行

った。また、課外時間での聴解練習頻度を自己モニタリングできるように、記録表の使用を導入した。毎日記録し続けることによって、学習者が自分の練習状況をより把握でき、適時に修正できるようになると考える。この訓練活動に参加した学習者の記録集計結果を比較して見ると、学習者一人一人の普段の練習状況を量にして表示できたため、個人差が一目でわかるようになった。S6 と S8 の結果を見てわかるように、練習頻度の違いが聴解能力にも反映していることがわかる。今後は学習者にお互いのデータを見せることによって、練習頻度の少ない学習者に直ちに学習行動の修正が期待される。長期間の週間集計結果からも同様な傾向が見られた。グループ B の S7 は練習期間中徐々に練習頻度が高くなった変化が見られた。しかし、グループ A の S4 は訓練前後の練習頻度には大きな変化は見られなかったものの、練習量は S7 に比べるとかなり多いことが集計した棒グラフではっきりとわかる。今回の結果をもとに、今後はこの集計した棒グラフの結果を一定期間ごとに学習者たちに比較してもらいながら、練習行動の不足している学習者に自己修正させることができると考える。

それから、記録表のほか、今回の聴解練習に参加者に生教材の利用、そして、脱中国語字幕での練習方法にチャレンジすることを指示した。練習する材料を日本語字幕か、字幕なしにするかは自由に選んでもらい、中国語字幕以外での練習を実行してもらった。グループ A の参加者がグループ B の参加者より、字幕なしにチャレンジした割合が多いことから、学習者が自分の能力にあった練習をしていると言えよう。また、日本語字幕は字幕なしの前のステップであることがうかがえる。今後は最も練習効果が期待できる字幕種類と学習者レベルとの組み合わせを探究することも課題の一つとなる。

そして、脱中国語字幕で聴解練習をさせた上、内容理解の自己チェックに関しての訓練も行った。内容理解に関する質問に答えてもらうことで生教材の内容全般に対する理解度をもっと正確に測ることができると考えられるが、今回は課外時間で自由に材料を選んで

もらっていたため、まず、自己モニタリングに関する訓練が目標であった。

実践群と対照群と比べた結果、今回の記録表及びチェックシートを用いた訓練に参加した学習者は、メタ認知ストラテジーの使用に変化が見られたと言えよう。そして、訓練終了の2か月後もその変化がある程度維持していることが見られた。特に「内容理解について自己モニターする」項目4が対照群との差が目立っている。このことは学習ストラテジー使用は教示できるとの主張（Rost & Ross, 1991 ; Thompson & Rubin, 1996）を支持する結果となった。

聴解学習ストラテジー全般の使用調査結果からも聴解能力別間の違いが見られたと言えよう。特に分類C「視聴・生教材利用ストラテジー」、分類D「推測ストラテジー」において、グループAの参加者がグループBの参加者より多用していることがわかる。唯一グループBの参加者がグループAの参加者より多用している分類は分類Bの「認知・基礎ストラテジー」であった。以上の結果からは学習者が聴解能力の上達状況によって、視聴・生教材を多く練習に取り入れたり、視聴内容理解に巧みに推測ストラテジーを働かせたりしていることがわかる。

インタビューの結果からも参加者たちが、この訓練に参加することによって、聴解練習行動および生教材の内容理解に関して、自己モニタリングするようになったと報告されている。今回の試みによって、メタ認知ストラテジー使用を促す成果がみられたといえよう。今後は本訓練をベースに、例えば、内容理解を測る方法を取り入れたり、訓練参加者の人数を増やしたりなど、学習ストラテジー教示に関する研究を続けていきたいと考えている。引き続きJFL学習者に対する課外時間における自律学習能力の育成方法を探り、確立していきたいと考える。

付記：本稿は科技部の研究助成（助成番号 MOST 104-2410-H-130-035-1）による研究成果の一部である。

## 参考文献

- O'Malley, J. M., Chamot, A.U., and Kupper, L. "Listening comprehension Strategies in second language acquisition." *Applied Linguistics*, vol. 10, no. 4, Oxford: Oxford University Press, 1989, pp. 418-437.
- Oxford, R. L. *Language learning strategies: What every teacher should know*. NY: Newbury House, 1990.
- Rost, M., and Ross, S. "Learner use of strategies in interaction: Typology and teachability." *Language Learning*, vol. 41, no. 2, Michigan: Wiley-Blackwell, 1991, pp. 235-273.
- Thompson, I., & Rubin. J. "Can Strategy Instruction Improve Listening Comprehension." *Foreign Language Annals*, vol. 29, no. 3, Virginia: Wiley-Blackwell, 1996, pp. 331-342.
- Vandergrift, L. "The Comprehension Strategies of Second Language (French) Listeners : A Descriptive Study." *Foreign Language Annals*, vol. 30, Virginia: Wiley-Blackwell, 1997, pp. 387-409.
- Vandergrift, L. "Facilitating second language listening comprehension : acquiring successful strategies." *ELT Journal*, vol. 53, no. 3, Oxford: Oxford University Press, 1999, pp. 168-176.
- 前田啓朗 (2002) 「高校生英語学習者の学習方略使用と学習達成」『STEP Bulletin』第 14 回、東京：日本英語検定協会、pp.26-38.
- 元木芳子 (2006) 「第二言語学習と学習ストラテジー」『日本大学大学大学院総合社会情報研究科紀要』第 7 号、東京：日本大学大学大学院総合社会情報研究科、pp.689-700.
- 杉浦理恵 (2007) 「英語学習における高等専門学校生の学習ストラテジーの使用—質問紙調査に見る現状と課題—」『茨城工業高等専門学校研究彙報』第 42 号、茨城：茨城工業高等専門学校、pp.15-21.
- 杉谷乃百合(2012) 「大学生のモチベーション、メタ認知、学習スキル」『キリストと世界:東京基督教大学紀要』第 22 号、千葉：東京基督教大学教授会、pp.105-113.

- 竹内理 (1999) 「「学習スタイル」と「外国語学習方略」—実証的研究をもとにして」『関西大学視聴覚教育』第 22 号、大阪：関西大学視聴覚教室、pp.1-19.
- 竹内理(2003)『より良い外国語学習法を求めて—外国語学習成功者の研究』東京：松柏社.
- 富阪容子(2007)「自己評価とメタ認知ストラテジー—留学生面接調査の結果分析から—」『言語と文化』11 巻、兵庫：甲南大学国際言語文化センター、pp.139-151.
- 呉如恵 (2010)「聴解に関する学習ストラテジー項目の作成—聴解能力の優れた学生を調査対象に—」『銘傳日本語教育』第 14 期、桃園：銘伝大学応用日本語学科、pp.181-205.
- 呉如恵 (2011)「聴解学習ストラテジーの使用状況と聴解能力との相関」『台湾日語教育学報』第 16 号、台北：台湾日本語教育学会、pp.69-97.
- 呉如恵(2012)「聴解に役立つ学習ストラテジー質問紙の作成—台湾 JFL 学習者を対象に—」『東呉日語教育学報』第 39 期、台北：東呉大学日本語文学学科、pp.49-77.
- 大和隆介 (2003)「学習ストラテジーを取り入れた言語指導—海外の指導法が示唆するもの—」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』第 52 巻、岐阜：岐阜大学教育学部、pp.97—113.